

種
文学賞

令和三年第二回

作品集

中学生～高校生の部



令和三年二回目の種文学賞は、次のお題で作品を募集しました。

小学二～三年生の部 「けが」

小学四～六年生の部 「地の文をつくろう くいよいよ」

中学生～高校生の部 「地の文をつくろう カスタム なんだったの」

「スポーツの比較」

ここでは、中学生～高校生の部の全作品を紹介いたします。どれもすばらしい文章ですので、ぜひお楽しみください！

※ 筆者・作者名はペンネームで記してあります。

【中学生～高校生の部 「地の文をつくろう カスタム」】

☆ このお題は、小学四年生～六年生の部と同じく、二人の人物の会話文を読んで、①その場面までのあらすじを百字以内で作る、②地の文を書き加えて場面を完成させる、という二つの課題にとりくむという内容です。ただし、すべての会話文の前後に地の文を必ず加えなければならないことにしていますし、どのような地の文にしなければならぬか条件がつけられている部分があって、多少難しさが上がっています。

まずは、その会話文を読んだ上で、それぞれの作品をご覧ください。なお、へ～内に記されているのが、その部分に加える地の文が満たさなければならぬ条件です。

〈人物以外の描写も入れる〉

「何あいつ？ なんだったの、一体」

「ぎ、さあ……」

「まあ、いいや、行こうか」

〈人物以外の描写も入れ、さらに全体で百五十文字以上からなる複数の段落で構成する〉

「どうしたの？ 行くよ」

「あ、ごめん」

〈四十文字以上にする〉

作者 かたさなさてたか（中一）

（これまでのあらすじ）

野球が好きなぼくと宮野はある日、応援している強いチームの試合と一緒に見に行くと、相手は格下なのに、その新メンバーがホームランを打つなどして十対二で負けた上、首位になれぬまま二位で終わってしまった。（百字）

試合が終わり、ほとんどの人は肩をおとして球場から出て行った。観客席にいる人もまばらで、ここ数日冷えこんだので冷たい風がふいている。宮野が、うつむいて

「何あいつ？ 何だったの、一体」

と言った。ぼくは肩をすくめた。

「さ、さあ……」

すると、宮野は立ち上がって、気分をいれかえたように

「まあ、いいや、行こうか」

と言い、ぼくたちは深い深い悲しみと共に帰る準備を始めた。

勝っていれば今ごろ大喜びしながら食べていたはずの美味しいおやつをリュックにしまいながらぼくは今シーズンの様々な場面を思い出していた。今シーズンは二位だったが、それほどこちらのチームにミスがあったわけではなく、ホームランも打てば、三振もきちんととれていた。つまり、今回の二位は、あの実にタイミング悪く入団してきた新メンバーが、素晴らしかったということになる。

こう考えると、ぼくは、できることはしたんだし仕方がない、こちらのチームにもあんな強い人がいたらいいのにと思った。そして、考えごとをし
ているうちに、もう宮野は準備が終わっていて、

「どうしたの？行くよ」

と言われてしまった。

「あ、ごめん」

こうして、ぼくたちは、強い新メンバー投入を切望しながら家に帰り、持って帰ってきたおいしいおやつを食べてから、提出期限が明日の数一の
宿題をとき始めた。

作者 ゆなつく(中一)



(これまでのあらすじ)

ある日、樹は中学校の友達ともだちの颯太そうたと喧嘩けんかをしてしまった。翌日よくじつになっても仲直りなかなおできず、ついに下校
時間かんげいとなってしまった。樹は颯太とは関係かんけいのない友達である蓮れんと帰っていた時に、偶然ぐうぜんにも颯太と会
ってしまった。(九十七字)

どうしてあんなことを言ってしまったのだろう。僕は、授業中じゅぎょうちゆうも休憩時間きゅうけいじかんも、ずっと颯太との喧嘩けんかについて考えていた。普段ふだんそんなことは絶対ぜったいに
言わないのに、あの時、僕はあいつに酷い罵声ののしりを浴びせてしまった。幼馴染おさないしみでも、どんなに仲が良くても、言って良い事よきことと駄目だめな事がある、というの

は分かっていた。それでも、感情を露わにしてぶつけてしまった。明日になったら颯太も喋りかけてくれるかな、と僅かに期待したが、彼は僕以外の友達と楽しそうに話してばかりで、こっちには目も合わせてくれなかった。

昼休みになって、謝りに行こうとすぐに席を立ち、颯太に近づこうとした。でも、あいつはそそくさと教室を出て、他クラスの奴らと食堂に向かってしまった。僕にはそれを追いかける勇氣も無かったし、追いかけたところで無視されるかもしれないという恐怖心に駆られてしまった。僕は颯太に話しかけようとするのを諦めた。

ついにホームルームが終わり、クラスメイトが教室を出ていき始めた。僕は部活があったため、違うクラスだが同じ部活の蓮と一緒にコートへ向かった。いつもなら颯太と一緒にいる道を違う奴と歩くのは、やっぱり少し違和感があった。

秋の終わり頃だったため空はすぐに暗くなり、僅かに残っていた太陽の光も部活のミーティングが終わるころには無くなっていた。僕はさっさと着替えを済ませ、後輩にお疲れ、と声をかけてから、密かに視界から居なくなった颯太を探しながらも蓮と校門を出た。

街灯で照らされた暗い通学路を蓮と話しながら帰っていると、不意に颯太が現れ、僕の方をじっと見つめてきた。僕はなんで急に出てきたんだろ、と思いつつも謝るなら今しかない、と口を開こうとした。その瞬間、颯太は僕を鋭く睨み、そして去っていった。僕も、そして蓮も、颯太が何をしたかったのか分からなかった。ましてや蓮は一切颯太と関わりが無かったのだから、不審感もより一層増していただろう。

「何あいつ？ 何だったの、一体」

蓮が僕にきいてきた。

「さ、さあ……」

僕はまるで颯太の事を知らないみたいに答えた。

「まあ、いいや、行こうか」

僕は後ろめたい気持ちを残しながらも、再び歩き出した。

気付いたらもう、家の前だった。僕は蓮にまた明日、と手を振り家に入った。

軽く風呂に入り、夕ご飯を食べ、二階の自室で宿題を済ました後、僕の目に一週間前颯太とする約束をしたゲーム機が映った。いつもだったら大好きで、暇があったらずっとやれるゲームも、今はかりはする気になれなかった。ふと窓を開けると、寒い空気が顔に触れた。空にはいくつかの星が輝いていた。

僕は気付いたら寝てしまっていた。精神的に疲れていたのだろうか。ふと目が覚めると朝になっていた。ただ、いつも起きている時間に比べると少し早かったので気分転換に風呂に入ってから学校に行くことにした。さっぱりした後、お母さんが用意してくれたご飯を食べ、制服を着て家を出た。待っていてくれたのか、たまたまなのかは分からないが、横を見ると蓮がいた。おはよ、と挨拶を交わし二人で通学路を進んだ。あと少しで学校、という時に僕は一瞬颯太を見た気がした。ふと立ち止まってしまった。蓮が僕に声をかけた。

「どうしたの？ 行くよ」

僕はきよるきよると動かしていた目の焦点を蓮に戻し、

「あ、ごめん」

と軽く謝って校門をくぐった。僕の気持ちは晴れないまま、颯太のいる教室に向かった。

(これまでのあらすじ)

ロンメルとマンシュタイン、グデーリアンはいつもの帰り道を三人で歩いていた。しかし、グデーリアンが、近くの公園で遊んでから帰ろうと突然言い出した。教師の言いつけを守るロンメルは強めに反対した。(九十五字)

強めの風が吹く中、ロンメルはマンシュタインらに背を向けて、帰り道をゆっくりと歩いた。

「何あいつ？ 何だったの、一体」

グデーリアンは呆然とした顔でそう問いかけた。突然のロンメルの行動に戸惑っていた。

「さ、さあ……」

マンシュタインは、ロンメルの背を目で追いながらそう答えた。

「まあ、いいや、行こうか」

グデーリアンは歩き出しながら仕切り直すようにそう言った。しかし、マンシュタインは頭の中でロンメルの言っていたことを繰り返し返していた。

ロンメルの言っていたことも一理ある。しかし、グデーリアンの友情を裏切るわけにはいかない。決まりか、友情、マンシュタインはただひたすら

迷い続けていた。

既に辺りは静まり返っていた。

「どうしたの？ 行くよ」

その静まりを破るかのようにグデーリアンはそう言った。

「あ、ごめん」

マンシュタインはグデーリアンのその一言で我に返り、一言謝ると、グデーリアンについて行った。

作者 N (中二)

(これまでのあらすじ)

自信を持ってなく、人の言いなりになってしまふ自分を嫌っているつとむは最近つむぎと名乗る女の子が出てくる奇妙な夢をみた。友達のもとと下校している時、知らない女の子がつとむの目の前で立ち止まった。(九十五字)

女の子がさっと小さく四つ折りにされた真っ白な紙をつとむに渡した。つとむは紙を開け、ともと覗き込むようにして見た。その紙には整った字で「明日、あなたは生まれ変わる。――とだけ書かれていた。ともは人と話すのが苦手なつとむのかわりにこの言葉について女の子に聞こうと思ったがすでに去ってしまった。

「何あいつ? 何だったの、一体」

と、つとむの気持ちを代弁するかのように困惑した表情でともは話しかけた。

「さ、さあ……」

何かを思い出したかのようにあいまいな返事でつとむは返した。

「まあ、いいや、行こうか」

と、ともはつとむの不思議がっている様子に気が付かず歩き出した。

つとむは奇妙な夢にでてきたつむぎと名乗る女の子とさっき会った女の子と似ているなど思った。つとむが記憶をたどっていると、夢の中でも女の子は——あともう少しで、あなたは生まれ変わる——と書いた四つ折りの紙を渡してきたような気がした。つとむはその女の子がなにを言いたいのかさっぱりわからなかった。

ともと別れ、帰宅し、夕食を食べたり勉強をしたりしたが頭の片隅に今日の不思議な出来事がありずっと上の空だった。つとむは寝たら女の子と会えるかもしれないと思いい目を閉じ眠りについた。

目を開けるとそこは学校の教室だった。目の前には女の子がつとむのことを見て立っていた。女の子はいつもと同じように四つ折りの紙を差し出した。今までのに比べてかなりの長文だった。そこには——明日、あなたは生まれ変わる。いや、あなたは生まれ変わらなければいけない。あなたは心の窓を日に日に閉ざしていつている。このままだとあなたは心の窓を閉ざし続け、人生がめちゃくちゃになってしまう。けれども、明日、自信を持ってなくて言いなりになってしまう自分を変えることができたなら、明日、あなたは生まれ変わる。——読み終わると夢の中でつとむの意識がだんだん遠のいていった。

「どうしたの？行くよ」

ぼんやりしながら、立ち止まっているつとむにともが心配そうに話しかけていた。つとむはその一言で我に返った。気づけば道のど真ん中で立ち止まっていた。

「あ、ごめん」

短い返事だけをして、さっきまで見ていた夢のことを考えながらまた歩き出した。

つとむはいつものように学校に着いた。いつもと変わらない学校なのに、つとむには学校が大きく見えた。つとむは決心した。自分を変えるために、
一步を踏み出してみようと。

自分に自信を持ちながら一步踏み込んだ教室はいつもと違う光景に見えた。

作者 今年も冬眠中(中三)

(これまでのあらすじ)

高校二年生のそうたは同級生のまおのことが気になっている。しかし、まおは鈍感で何も気づいていない。それに困ったそうたは幼馴染みでまおの親友のさゆりに相談しているが、さゆりはそうたのことが好きである。(九十八字)

ある晴れた日の昼休みにそうたはいつものメンバーでバスケットをしていた。バスケットゴール付近でシュートの入れ合いをしていた時に、自動販売機に向かうさゆりとまおがバスケットの側を通った。もちろん、そうたはまおのことに気がつき、また、その2人を見た男子達は変に盛り上げてそうたにシュートをうたせようとした。さゆりとまおはそわそわしている男子達に気付いている。そうたにとっては、まおにかっこいい姿を見せてつける絶好のチャンスだったので、すんなりと受け入れた。調子に乗りスリーポイントシュートをねらおうとして、ゴールから離れてボールをかまえる。NBA選手になったつもりで投げるも、少し緊張したせいなのか、ボールはゴールまで距離が届かず一かすりもせず落ちていった。さっきまででていた太陽は雲でかくれきっていた。そうたは男子達に冷やかされたが、一番気になったのは、まおの反応だった。勝手に巻き込まれ、しまいには男子から

変な視線を送られたまおは、

「何あいつ？ 何だったの、一体」

と、思っていたことをふと口に出してしまった。

「さ、さあ……」

さゆりにはこう答えることしかできなかった。

「まあ、いいや、行こうか」

まおは何とも思っていないさそうだ。鈍感でそうたからの行為には一切気づいていないみたいだ。さゆりはまおの反応に安心したが、それよりも複雑な思いで頭がいっぱいだった。

さゆりは幼稚園からそうたとずっと一緒に育ってきた。小学校、中学校も同じで毎日一緒に登下校してきた。互いのテストの点数や成績、黒歴史、今まで好きになってきた人など、ほとんど知り尽くしている。二人は親友みたいな関係だった。しかし、高校生にもなると垢抜けて二人ともイメージががらりと変わった。そして、性格も少し大人っぽくなった。そうたはスポーツは相変わらず何でもできる。すっかりイケてる男子高校生になったそうたのことにさゆりは少しひかれている。ずっと一緒だったからこそ、そうたが本当にバスケが上手なのも知っているし、バスケをしている時のかっこよさも知っている。だからさっきのミスに安心したと同時にそうたに同情した。さゆりはそうたがまおのことを好きと知っているため、自分がそうしたことが好きと伝えることができず、幼馴染みという関係でそうたの恋愛を応援しなければならぬ。

授業開始5分前の予鈴が鳴った。

「どうしたの？ 行くよ」

こう、まおに声をかけられるまでずっと、落胆していつもより小さく見えるそうたの背中を見つめていた。

「あ、ごめん」

あわてて、まおの方に目線を動かした。

さゆりはそうたにもまおにも相談できずに一人で抱え込んでいる。もういっそのこと、さゆりは身をひいて二人の恋愛を応援すべきなのだろうか。今の人間関係を壊したくないのだ。少しまおと距離ができ、後ろからついていくように自動販売機へ急いで向かった。気づけばあたりは暗くなり、雨が降りだしそうだった。

作者 ドアノブ(高一)

(これまでのあらすじ)

ここは中部国際空港。これから海外出張に行く跳太と舐子は飛行機に乗る直前、ある紳士然とした人に謎の鞆を渡された。その鞆の中にはなんとローブと1枚の手紙、そして、白い粉と葉っぱが入っていた。(九十三字)

手紙を開いてみるとそこには『跳太二十五回、舐子●回』と書かれていた。舐子のところは塗り潰されていて読めない。跳太と舐子はその手紙を見るのに夢中になって飛行機に乗り遅れてしまった。この手紙の中身は気になってはいたが、今はそれ以上に飛行機に乗れず、上司に怒られることに恐怖を感じていた。まあでもしかたがないので、会社に戻った。誰もいなかった。ただ一台のパソコンの電源がついているだけ。

「何あいつ? 何だったの、一体」

跳太はそう言って鞆の中に入っていた白い粉を取り出した。跳太が舐子の方を見ると、彼女は手紙を何度も何度もみている。

一方、跳太君、粉を舐めた。すると彼は何故かこう言った。

「や、さあ……」

舐子は跳太の謎の発言を無視して鞆の中に隠すように入れてあった一枚の絵ハガキを見つけた。そこには『カエハカエカ』という文字とともに2匹の動物が描いてあった。舐子はこの意味の分からない文字に頭をかかえ、油性ペンを取り出した。跳太はニコッと笑いロープを取り出したかと思うと小さな声で言った。

「まあ、いいや、行こうか」

そう言うと、跳太は倒れた。舐子は倒れた跳太に見向きもせず、ただただその場で笑っていた。次の日、跳太は朝早く来た会社の平社員に発見された。平社員は警察などその他もろもろを呼んだ。しかし、跳太はもう既に死亡しており、死因は不明。これは単なる事故として片付けられた。

この話はちょっとだけ昔のこと。この後すぐに跳太の死体はどっかに行っちゃう。誰のしわざか。私は何も見ていない。ただ『書き直した』だけ。「どうしたの？行くよ」

跳太は目を覚ます。そこには一人のおじさんと一人の女。何か話し合っている。

これはもう数十回目。簡単なトリックなのに跳太は気付かない。一人になればいい。舐子から鞆を持って逃げればいい。ただそれだけのことなのに。跳太はここから抜け出さなければならない。

「あ、ごめん」

さっきと同じ女の声。ここで思い出す。九回目に見た暗号。十三回目に見た目。何度も味わった死。この後自分は何をすべきなのか考える。視界が真っ暗になる。これは二十回目。

ここは中部国際空港。笑顔がタイセツ。

【中学生～高校生の部 「スポーツの比較」】

こちらは、二つのスポーツを取り上げ、その違いを比較する小論文課題です。

ソフトボールと野球の比較

筆者 N i X 4 9 0 (中一)

今回、私は学校で所属しているクラブのソフトボールと、似通っている野球を比較する。ソフトボールと野球は大まかなところは似ているが、細かい部分は少なからず違うのだ。これから、ルールや使う物などの違いを挙げていく。

まず、形式面の違いを記そう。ソフトボールは野球より塁間距離が短い。つまり、走る距離がソフトボールの方が短いので、野球をしたいけれど体力が少したりない人などにはソフトボールが向いているかもしれない。また、投球距離もソフトボールの方が短いので、野球をするには腕力がたりない人もソフトボールに向いているかもしれない。しかし、グラウンドの広さもソフトボールの方がせまいので、それなりに腕力がないとボールを遠くに打てない。その力が強い人はかなり遠くまで飛ばせるかもしれないが、弱い人はすぐにボールをとられてアウトになってしまう。最後に、投球方法が最も大きな違いである。野球はオーバースローだが、ソフトボールはアンダースローである。アンダースローの方がふんわりとして投げやすそうなイメージがあるかもしれないが、コントロールがとても難しい。いいかげんに投げると、とんでもない方向に飛んでいたり、高く投げ上げてフォアボールになってしまう。高すぎず低すぎず、かつ速くボールを投げるのは、相当練習しないと得られない技だろう。

野球とソフトボールでこんなに形式が違うのなら、用具はどうだろうか。まず、あまり気づかれにくいのが、グローブのポケットの深さがソフトボールの方が深い。ポケットというのは、グローブの親指と人差し指の間の部位のことだ。このポケットがソフトボールの方が深いのは、野球のボールよりソフトボールのボールの方が大きいのであたりまえのことなのだが、私は気がつかなかった。この大きさの違いはどれくらいかというところ、ソフトボールのボールは手の平と中指の第二関節を合わせた程度だ。野球ボールの一・二倍ほどだろうか。手が小さい人は少々投げにくいかもしれない。字数制限の関係で全部は書けないけれど、ルールも一つ違う点を挙げよう。ソフトボールではリードができない。野球では、出塁した走者は、一定の距離をリードできるそうだが、ソフトボールは塁を離れるとアウトになってしまう。

これでもいいの違いを挙げられたが、今年の東京オリンピック二〇二〇では野球もソフトボールも日本が金メダルをとった。私のクラブのソフトボールと、その兄弟のようなスポーツの野球が一位に輝いたのはうれしいことだ。体を動かすのが好きな人は、ソフトボールや野球でなくても、スポーツを試してみたらどうだろうか。

テニスとバレーの比較

筆者 あ（高一）



ある二つのスポーツを取り上げると必ず違いが見出せる。私は沢山あるスポーツのうちテニスとバレーについて違いを述べる。この二つを取り上げるのは、私が中学の時にテニスを、高校に入ってから一年間はバレーを部活動としてしているからだ。この二つの競技は、コートがあり、ネットがあり、サーブから始まり、相手にミスをさせる目的とするなどの様々な共通点がある。では、これらのスポーツにはどのような違いがあるのか。

先にも言ったように、二つの競技はサーブから始まる。しかし、テニスの場合、サーブはコートの右または左側から打ち、一ポイントごとに左右を交かえる。右から打つ場合、打つ人から見て相手のコートにあるネット付近の左側の正方形のエリアにサーブを入れなければならない、左側から打つ場合、今度は打つ人から見て相手コートの右側の正方形のエリアに入れなければならない。一方、バレーは相手のコート内ならどこに入れてもいい。またテニスはサーブを一回ミスしてももう一度打ち直せるが、バレーは一回しか打てない。これにより、テニスはファーストサーブを挑戦的に打てるが、バレーは確実に入れなければならない。その上で相手を取りづらいうサーブを打たなければならないのだ。さらにバレーのネットは2m43cmあるため上から下へ叩きつけるようなサーブを打つとまずネットは越えられないので、放物線を描くようなサーブが必要となる。一方、テニスはネットを支える両脇の柱が約1mでネットの中心はそれよりも低い。そのためサーブはラケットのある分上から下に叩きつける感覚で打っても入る。それによりバレーではプロでも球速は時速100キロを出すのも難しいのに対し、テニスでは時速200キロ超を出す選手もいる。最後に、テニスとバレーではボールの回転のかけ方がまったく異なる。テニスでは大きく三種類のサーブで、フラット、スライス、ドライブというのがあり、まず、フラットは特に変化させないため軌道が読みやすいのだが、回転を余分にかけて分スピードがとても速い。スライスは一回地面についた後あまりはねず、予想される軌道よりも左右のどちらかにずれる。そしてドライブは、トップスピントも言い、縦回転をよくかけるのでその分よくはねる。またサーブに回転を加えると相手を取りづらくなる反面自分のサーブが安定するようになる。それに比べてバレーはスパイクサーブというネット際でスパイクを打つときと同じぐらい高く上に飛んで打点をネットより上にし、ドライブ回転させながら叩きつけるものもあるが、ほとんどは打った本人も打った後の軌道が分からないほど不規則変化する無回転サーブが主流である。これは風のない体育館だからできるのかもしれない。

以上、テニスとバレーのサーブについて書いたが、ここからテニスとバレーは一見似ていてもまったく異なるスポーツであると気付くことができる。

サッカーとフットサルの違い

筆者 F (高一)

私は、サッカーとフットサルの違いについて調べた。サッカーとフットサルは同じに見えて、結構異なっていた。例えば、サッカーの出場人数は十一人なのをたいして、フットサルは五人しかいない。またコートの大きさもサッカーは六八m×一〇五mでフットサルは二〇m×四〇mの大きさなのだ。試合時間もサッカー四五分、フットサル二〇分だ。

ボールの大きさも違う。サッカーでは、一三歳以上のカテゴリーでは直径約二二cmの五号球を使うが、フットサルでは、直径約二〇cmの四号球とサッカーボールより小さいボールを使う。またフットサルボールはローバウンドといわれる弾みにくいボールが使用されている。

さらに、ルールにも大きな違いがある。例えば、サッカーにはオフサイドがあるのに対して、フットサルにはオフサイドがない。プレー再開時もサッカーはスローインといって手を使ってピッチ内にボールを投げる。しかしフットサルはキックインといってコート内に蹴ってプレーを再開するといふ違いがある。またサッカーは、ゴールに平行なコートを割ってボールがコート外に出たときに、ゴールキックといって、ゴールキーパーがボールを蹴り入れてプレーを再開するが、フットサルは手で投げて再開される。

サッカーとフットサルにはプレイの違いもある。フットサルはキーパーを除いた四人が常に回り続けるのに対して、サッカーは十人それぞれのポジションがほぼ固定された状態でプレイされる。また、フットサルは基本的に空中戦がないが、サッカーではクロス、コーナーキックなど多数の空中戦がある。接触プレーもフットサルはサッカーより厳しくファールを取られるが、サッカーでは許容されている。守備目的で体当たりをしたりするのがフットサルでは原則とされていた。

サッカーとフットサルは私の中では、ずっとコートの大きさだけが違うと思っていただけだったが、今回調べた結果、全然違っていたと分かった。